アナタ日和

B A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナタ日和

【Nコード】

N8943Z

【作者名】

BAN

【あらすじ】

男目線の恋話

作者の過去を振り返りながら書きました。

結構、荒れた人生ですが、学び取る物もありました。

ある病を背負っています、僕のこの話を読んで

誰か共感して、誰か前に一歩進めれば、幸いです。

キミは一人じゃない、生きている。
幸せは得るものじゃない、気付くものだ。

気軽に読んで行ってください。

感想をくれると、次話の更新速度が上がりますw

誹謗中傷はご勘弁ください。

文章力が無いのも重々承知です。

本当にただの自己満足です

プロローグ（前書き）

男目線の恋話

作者の過去を振り返りながら書きました。

結構、荒れた人生ですが、学び取る物もありました。

ある病を背負っていますが、僕のこの話を読んで

誰か共感して、誰か前に一歩進めれば、幸いです。

キミは一人じゃない、生きている。

幸せは得るものじゃない、気付くものだ。

気軽に読んで行ってください。

感想をくれると、次話の更新速度が上がりますw

誹謗中傷はご勘弁ください。

文章力が無いのも重々承知です。

本当にただの自己満足です

プロローグ

〃 〃 〃

枕元の携帯が音楽を流し始める。

「ん…、ッサイな…。」

携帯を取りディスプレイを眺める。

後輩の名前がそこにはあった。

「もしもし…。」

「もしもし亀よー…。」

「先輩ノリ悪っ！」

ベッドから起き上がり、煙草に手を伸ばし、火を点ける。

「なんだ？朝から。」

「えええ！？、先輩が起こしに来いと…。」

「ああ…、悪い。」

事情を把握した俺は服を着替える事にした。

シャワーを浴びて、軽く髪の毛をセットする。

適当なパーカー着て、その上に学ランを羽織る。

玄関に降りて、靴箱の上にある鍵を手に取り、外に出る。

ポポポポ…。

数台のウルサイ単車と数名の後輩達。

「おはよ。」

眠気眼で声を掛けると数名の後輩が笑顔で迎えてくれた。

「じゃあ、行きますか？」

後輩の後ろに乗ると、朝日が眩しい世界へと走りだした。

近くの駐車場に着くと、そこには真つ青なスポーツカーがある。

日産 S15シルビア

足回りとブーストアップとフルエアロ装備のドリフト仕様である。

鍵を向けると軽快な音と共に扉のロックが外れる。

「先輩、単車にしませんか？」

俺の車を眺めながら、笑いながら後輩が言う。

「ま、俺がお前に抜かれたらな。」

そう言うつと後輩は少し悔しそうに黙った。

「先輩、単車でも馬鹿なのに…。」
ボソツと後輩が呟いた。

それをきちんと耳に捉えた俺は、バケットシートに乗り込みながら無視しておく事にした。

そして、キーを差込み、回す。

このシルビアは先輩に譲ってもらった車で、勿論、無免許である。

マフラーを交換してある為、俗に言うウルサイエキゾーストを奏でながら、シルビアは始動した。

同時に煙草に火を点け、徐々に上がる水温を眺めて、待つ。

「先輩つ、先に行つときます!」
「おー、抜かれないようにな。」
「出来る限り頑張ります。」

そう残して、後輩達は先に行く。

チューニングされた車は彼女と一緒にだ。
些細な事を気をつけてあげなければ、すぐに壊れてしまう。
だが、それが良いのかもしれない。

(…水温、…油温、…排気温、…電圧、…ブースト圧…、オールグ
リン…)

アクセルを軽く2・3度蹴る。
けたたましい音を奏でながら、マフラーが吼える。

(いくよ、相棒。)

ギアを一速に叩き込み、クラッチを蹴る。
シートに体が沈み込む。

この感覚がどうしてもやめれない。
信号交差点が青なのを確認すると、サイドを引きながら、クラッチ
を蹴り、白煙を上げながら交差点を曲がる。
あとはアクセル全開だ。

暫くすると、単車が数台見えてきた。

(捉えた…)

そのままギアを順々に上げていき、横を抜く。

(お先に…)

前に出るとブレーキランプを数度光らせ、そのまま学校へと向かう。

学校に着き、エンジンをクールダウンさせながら、後輩を待ってい

ると、玄関から友達が出てきた。
エンジンを止め、鍵をかけると、友達を迎える。

「よお、相変わらさずうるせえし、校門に白煙上げながら入ってくるなんて、馬鹿だろう?」

「ああ、それは自分でも分かってる。」

「大人しく単車にしとけて。」

「寒いからヤダ。」

と、友達と軽口を交わしながら、後輩を待つ事を忘れ、学校に入っていく。

階段を上り、教室に近づくと、ガヤガヤと喧騒が聞える。

「…はは!、…でさー?」

(うるせえ…)

こうして、一日が始まっていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8943z/>

アナタ日和

2011年12月28日02時14分発行